

型で、他の 1 種、1 変種がともに複雑染色中央粒型であった。分裂期染色体は、すべて勾配的染色体長および対称的腕比で類似していたが、付随体染色体の数において相違していた。すなわち、リンリンドウは 9 個の、ミヤマリンドウは 1 個の、イデリンドウは 0 個の付随体染色体が観察された。これらの事実から、ミヤマリンドウとイデリンドウとは染色体数において倍数関係が、核形態学的には近縁な関係があるのに対し、リンリンドウは大きく離れた位置にあることがわかった。

□原 寛ほか：Ozegahara, scientific research of the highmoor in central Japan. 456 pp., 11 pls. 1982, 日本学術振興会, 東京, ¥18,000, 取次店 丸善. “尾瀬ヶ原” (1934) の出版から 26 年振りて陣容を新にして本書出版のはこびとなった。第一回では昭和 25 年度から 3 カ年計画で調査が進められたが、今回は 1977 年から同じく 3 カ年計画で文部省の科研費によって遂行された。この間には自然も人も非常な変化を遂げた。そしてその変化した自然を新しい目で見直すために行われたのである。本書に盛られた 41 篇の論文名は省略するが、地学, 生態関係 14, 動物 18, 植物 9 篇である。参加した研究者は 64 名で前回よりも 10 名増えている。前回に比べて新しいことは、生態関係が新しい手法によって活潑に業績を挙げたことである。また前回殆んど手がけられて居らなかった水生植物資料が委しくまとめられたこと、コウモリ類やトリコマイセスなどが新しく加えられたことである。反対に植物のリスト, 浮島関係は変化が少ないために省かれた。藻類の資料が一つもないのは残念である。

この 4 半世紀の間に尾瀬ヶ原の自然は大きく変えられた。否, 悪化して仕舞った。原の周辺は乾燥して周囲から尾瀬ザサなどがどっと侵入して来つつあり, 帰化植物も目立つ。弥四郎小屋から滝へ至る途にあった池などは跡かたも無くなった。道路には木材や板が敷かれ, 原を原形に回復させるために生態学者の努力が行われているが, その成果はどんなものであろうか。以前は弥四郎小屋が只一軒あったあたりには多くの山小屋や売店が並んで居り, 山の鼻あたりも同様である。これらから排泄された污水, 汚物は目の届かぬところに山積している。聞くところによれば東京都では南側の山をぶち抜いて, 只見川の水を頂戴する計画があるそうである。飛んでもないことで, それほど欲しければ原を訪れた者達に 1 升瓶 1 本宛の水を分けてやっても宜しかろうとも思う。

前回活躍された研究者のうち他界された方々は次の如くである。小倉 謙, 多田文男, 堀川芳雄, 水島正美, 朝比奈泰彦, 山崎文男 (炭素同位元素利用法を導入した), 久野久, 猪熊泰三, 倉田 悟の諸氏。なお父子二代に亘って活躍した息子さんの方は朝比奈正二郎, 上野俊一。

尾瀬ヶ原の今後の成行は誰にも判らない。出来るならばこのかけがえのない自然に対して末永く甲辞を述べなくてすむことを望む。(小林義雄)